

詩篇 23 篇の瞑想

– I will dwell in His house –



詩篇 23 篇は珠玉の詩篇と言われ、多くの人々がこの詩篇によって力づけられてきました。表現の描写は単純ですが、その内容は実に奥深いものがあります。

すべての節に、神がどのようなお方であるのか、その恵みの深さと豊かさが告白されています。それゆえ、この詩篇 23 篇は、まさに、神を知るための格好のテキストと言えましょう。ダビデをして、「いのちの日の限り、いつまでも、主の家に住みたい」と言わせた主のいつくしみと恵みの内実とはいったいなんだったのでしょうか。



空知太栄光キリスト教会牧師 銘形 秀則

詩篇 23 篇 聖書本文

新改訳聖書

主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
たとえ、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
まことに、私のいのちの日の限り、
いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

新共同訳聖書

主は羊飼いです、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。
主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。
死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖
それがわたしを力づける。
わたしを苦しめる者を前にしても
あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ
わたしの杯を溢れさせてくださる。
命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。

詩篇 23 篇瞑想 目次

| | |
|------------------------------------|----|
| 1. 主は私の羊飼い | 1 |
| (1) 主は羊飼いである | |
| (2) 私の(羊飼い) | |
| 2. 私は乏しいことがない | 3 |
| (1) 会得した「満ち足りる」という心境 | |
| (2) 会得へのプロセス | |
| 3. 緑の牧場といこいのほitori | 6 |
| (1) 真の安息が備えられていることを知る | |
| (2) 真の安息を得る二つの秘訣 | |
| 4. たましいのリニューアル | 10 |
| (1) 生ける神の臨在への渇き | |
| (2) リニューアルのためになすべきことは、「主の御前に静まること」 | |
| 5. 神のご計画と導き | 15 |
| (1) すべてのことを働かせて益としてくださる神 | |
| (2) 神の導きを確認するための手引き | |
| 6. 主の臨在の約束とその祝福 | 19 |
| (1) 祝福の連続性と未広がり・イサクに対して(創世記 2 6 章) | |
| (2) 祝福の一方性と守り・・・ヤコブに対して(創世記 2 8 章) | |
| 7. 主のむちと杖とは私の慰め | 23 |
| (1) 神の主権を認めること | |
| (2) イザヤ書 4 0 章に見る神の慰め | |
| (3) 使徒パウロが経験した神の慰め | |
| 8. ウェルカム・ホーム (1) | 27 |
| (1) 敵前での祝宴・・・神の食卓に招かれたゲスト | |
| (2) 放蕩息子に備えられた父の祝宴(ルカ 1 5 章のたとえ話) | |
| (3) 天国での備えられた婚姻の祝宴 | |

| | |
|-------------------------|----|
| 9. ウェルカム・ホーム (2) | 30 |
| (1) 歓迎の好意を表わすしるしとしての油 | |
| (2) 油注ぎのもつ歓迎の中身 | |
| 10. あふれる杯 | 34 |
| (1) 詩篇 65 篇に見る杯のピクチャー | |
| (2) キリストにある無尽蔵の恵み | |
| 11. ただひとつの願い | 39 |
| (1) いくしみと恵みとに追われる生涯 | |
| (2) とこしえに、主の家に住むこと | |

主は私の羊飼

主は私の羊飼 (1節 a) The Lord is my shepherd

<はじめに>

◆ス波尔ジョンはこの詩篇を『詩篇の真珠』と呼んでいる。表現の描写は単純ではあるが、その内容は奥が深い。この詩篇には、～のことをしなさいとか、・・・しなければならないといった表現はなく、また神への願いも何ひとつない。1節、1節が、神がどのようなお方であるのか、その恵みの深さと豊かさが記されている。それゆえ、この詩篇はまさに「神を知る」ための格好のものと言える。

1. 主は羊飼である

◆聖書には、「神と私」「神と私たち」の関係をさまざまなアナロジー(類比)で表現している。たとえば、詩篇23篇のように「羊飼いと羊」の関係、あるいは「陶器師と器」の関係、「ぶどうの木とその枝」の関係、「花婿と花嫁」の関係といった具合に・・・、である。

◆神を「羊飼」にたとえた最初の人是谁か？ それはヤコブである。彼はかつて羊飼いであった。彼は視力も衰えた死の床で、若かりし日のことをあれこれと思い起こしながら、常に、神が自分の「羊飼」であられたことを悟った。ヤコブは自分の子ヨセフを祝福して語った言葉の中でこう言っている。「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神、今日この日まで、ずっと私の羊飼いであられた神」と(創世記48章15節)。

◆聖書全体を見てみると、この「羊飼いと羊」の関係がいたるところにあるのを見出すことができる。

⇒羊飼いの羊に対するかわりを表わす<動詞>に注目してみよう！

たとえば・・・

(1) イザヤ書40章11節

「主は羊飼いのように、その群れを飼、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。」

(2) エゼキエル書34章11～16節

「まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を**捜し出し**、
この**世話を**する。・・・わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての
ところから**救い出して**、**世話を**する。わたしは・・・彼らを**連れ出し**・・・**集め**・・・**連
れて行き**・・・**養う**・・・わたしは失われたものを**捜し**、迷い出たものを**連れ戻し**、傷
ついたものを**包み**、病気のを**カづける**。」

(3) ヨハネ福音書 10 章 11 節、14 節、10 節

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のために**いのちを捨てます**」

「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを**知っています**。また、わたしのものは、
わたしを知っています。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているの
と同様です。」

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」

(4) 1 ペテロ書 2 章 25 節

「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり、
監督者である方のもとに帰ったのです。」

◆このように羊飼いと羊との関係は、至れり尽くせりの、特別な関係として描かれている。
主の心は羊飼いの心そのものであり、そのまなざしは優しく、すべての羊に注がれている。
道に迷い、山の中に取り残されたあわれな羊を決して見逃すことはしない。主は良い羊飼い
として羊に対してどこまでも忠実な方である。羊を裏切ったり、見捨てたり、不安に陥れたり、
狼が来たからといって自分から逃げ出すようなことは決してなさない。あらゆる危険
から羊を守るうとする。その羊飼いは、羊のために、ご自分のいのちを投げ出すことを少し
も惜しまれないのである。

2. 私の(羊飼い)

◆この詩篇には「主」ということばが 4 回、途中から「あなたに」代わって 3 回、そして「私」
ということばに至っては 15 回にも及んでいる。「私の」という、一見、見落としてしまいが
ちなこのことばはとても重要である。「イエスは救い主です」というのと、「イエスは私の救
い主です」というのでは雲泥の差があるように、「主は羊飼い」というのと、「主は私の羊飼
い」というのとでは天国と地獄の開きがある。トマスのように「私の主、私の神」と告白し
て、主を信じ受け入れるのでなければ、すべてが無益である。

◆聖書はすべて、神が「あなたに(私に)」宛てて書かれたラブレターである。聖書で言われて
いる「新しく生まれる」とは、私を救い、私を捜し、私を連れ出し、私を養い、私を守り、
私を導き、私を世話し、私をカづけてくれる良い羊飼いがあられることを、「私事として」知
ることであり、この関係を自分のこととして生きることなのである。

私は乏しいことがない

私は、乏しいことはありません。(1節b)
I have everything I need.

<はじめに>

◆主が私の羊飼いであってくださる時、ダビデが「私は、乏しいことがない」と告白していることに心を留めよう。それはどのような経験をいうのであろうか。多くの人々が自分の人生や境遇において、何らかの不平や不満を持っている。「・・・であればいいのに」、「こうなりたいののに」、「なぜそうならないのだろう」と。

◆しかしダビデはここで「私は乏しいことはありません」と言い放っている。主を羊飼いとする者たちは決して「乏しいことがない」ことを、聖書はいたるところで述べている。たとえば、・・・

(1)「主を恐れる者には乏しいことはない。若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は良いものに何ひとつ欠けることはない。」(詩篇34篇9-10節)

(2)「あなたの神、主が、あなたを良い地に導き入れようとしておられる・・・そこは、水の流れと泉があり、谷間と山を流れ出た深い淵がある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろの地、オリーブ油と蜜の地、そこは、あなたが十分に食物を食べ、何一つ足りないものがない地、その地の石は鉄であり、その山々からは青銅を掘り出すことのできる地である。あなたがたが食べて満ち足りたとき、主が賜った良い地について、あなたの神、主をほめたたえなければならぬ。」(申命記8章7-10節)

(3)「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます」(ピリピ4章19節)

◆特に、最後のパウロの告白は「私は乏しいことはありません」の新約版とも言える。なぜパウロがこのような告白をすることができたのであろうか。その背景に目を向けてみよう。

「乏しいから言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、

飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」(ピリピ4章11-12節)

◆私たちは、パウロがここで言い表している大切な教えを学ばなければならない。そこには二つの大原則が含まれている。第一はパウロが到達した心境であり、第二はその境地に至るまでの過程(プロセス)である。

1. 会得した「満ち足りる」という心境

◆まず、使徒パウロが会得した心境に注目したい。その心境とは「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました」という「満ち足りる」と訳されていることばである。このことばの正確な意味は、パウロが自己充足の状態にあり、周囲の状況や環境の変化などに依存しておらず、「自分の内に充足感を持っている」ということである。つまり、「私は、どんな境遇に置かれても充足感を失うことなく、情勢の変化や身のまわりの出来事によってうるたえずに生きる生き方を会得した」という意味である。

◆これが口先のことばではなかったことは、使徒の働き16章後半に記されている出来事をみればわかる。パウロとシラスは捕らえられ、ピリピの牢獄に入れられた。しかしなんと「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ、賛美の歌を歌っていた」(25節)のである。二人は牢獄という環境に支配されずに、「どんな境遇にあっても満ち足りる」という充足感を持ちながら、平静に行動している。

◆パウロは愛弟子のテモテにこの祝福を見失わないようにと勧めている。なぜなら「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道」だからである(1テモテ6章6節)。

◆マタイ6章34節で、イエスは「あすのための心配は無用です。明日のことは明日が心配します」と語っている。何を食べるか、何を着るか、つまり生活について心を痛め、心配してはいけない。自分の身にふりかかるどんな出来事にもうるたえではならないのである。なぜならそれらは神の支配の中にあるものだからである。むしろ「神の国とその義とを、第一に求める」ことである。

◆パウロは自分の周囲に起こっていることに振り回されないで生きることを会得した。どんな境遇に置かれても、またどこへ導かれても、何が起ころうとも、彼は満ち足りる道を会得していた。貧しくなっても豊かになっても、乏しくても富んでいても、それに支配されない心の平安、その秘訣をパウロは会得していたのである。

2. 会得へのプロセス

◆さて次に、その秘訣をパウロはどのように会得したのであろうか。それについて、パウロは「私は・・・学びました」と述べている。はじめから出来たのではなく、彼はいろいろな出来事、あらゆる境遇を通して「学んだ」のである。つまり「身につけて、自分のものとした」と言えよう。主はパウロのみならず、私たちひとりひとりに対しても「学ぶべき」レッスンを施してくださる方である。

◆主は、さまざまな出来事のプロセスを通して、次のようなことを私たちに学ばせようとしておられる。

- (1) 周囲の状況は絶えず変化している。それらは一時的であり、過ぎ去っていくものである。かといって厭世的になる必要はない。今、与えられている所で最善を尽くすことである。
- (2) 最も大切なことは、自分の心のあり方であり、神に対する関係である。自分の境遇はだれのせいでもない。それは神の許容の中にあることを知ることである。したがって、すねたり、ひがんだり、恨んだりといった罪(=甘え)に陥ってはならない。
- (3) 神は天の父として私を見守ってくださる。神のご計画にないことは何一つ起こらない。自分の髪の毛さえも、みな神に数えられているということを忘れてはならない。
- (4) 神のみこころと導きは神秘であり、私たちはその全貌を理解できないことを認めなければならない。思うようにいかないことも、すべては私たちの益のために必要なのである。主は、聖なる方であり、主のみこころは私たちの思いとは異なり、私たちの道とは異なるということを受け入れなければならない。

◆最後にもう一度、ピリピ書4章11、12節、そしてテモテ第一6章6節、詩23篇1節を瞑想しながら、主は私の羊飼いとして、今もすべての必要を与えてくださっていることを感謝しよう。

「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」

「この満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です」

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」

緑の牧場といこいのほとり

主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。(2節)

He lets me rest in fields of green grass
and leads me to quiet pools of fresh water.

<はじめに>

◆詩篇23篇2節の主題は**安息**(休息)である。2節のイメージは、良い牧者に導かれた羊が柔らかな草を食べて満足し、いこいの水のほとりで休んでいる光景である。キリストのものとなった者は安息を経験することができる。ところが、万年疲労のクリスチャン、ゆとりのないクリスチャン、顔に喜びのないクリスチャンがあまりに多いのではなからうか。

◆だれにとっても**休息**が必要である。音楽の流れの中にも休符がある。音楽用語に「ゲネラル・ポーズ」というのがある。「完全終止」である。その終止(休止)は音楽の流れに、より緊迫感と新鮮さを与える。同様に、私たちの生活の中にも休止や休息の時間がなくてはならない。つまり手を休める必要があるのである。頭もひっきりなしに何かを考えているというわけにはいかない。いつも緊張させていることはできないのである。休まずに働き続けているなら、いつかは必ず倒れる。金属疲労ということばがあるように、固い金属も繰り返される振動を受け続けることによって、いつかはダメになってしまう。張りつめた弓の糸をゆるめるように、忙しい毎日の中に休息を取る時が必要である。それは疲れた神経を回復させ、低下した活力をリフレッシュするためである。

◆今日、多くの人々は多忙な生活、複雑な人間関係、退屈な日常性の中で、身体と心の休息が取れずに、いつも疲れているイメージがある。ストレスから逃れるためにお金や娯楽、ドラッグ、セックス等を求めている。レジャーがもてはやされ、いやし系の音楽が好まれたりする。若者たちはバーチャル・リアリティ(仮想現実)の中に逃避する傾向にある。それだけ人々は真の休息(安息)を求めている時代なのである。そんな時代の中でも、この詩篇23篇の作者ダビデが経験した主にある安息が今も備えられている。

◆詩篇23篇は良い羊飼いを持つことによって、その羊飼いが羊である私たちを「緑の牧場に導き、いこいの水のほとりに伴ってください」のである。ところで、私たちのたましいが休息を取るためには、次のことが大切である。

1. 私の羊飼いは羊である私に真の安息を備えてくださっていることを知ること
2. 真の安息を得る二つの秘訣

- (1) イエスとくびきを共にすること
- (2) あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いをもって自分の願い事を神に知っていただくこと

1. 真の安息が備えられていることを知る

◆詩篇23篇2節の新約版が、マタイの福音書11章26節にあるイエスの招きである。イエスは言われた。「すべて(例外なく)、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」と。イエスのもとに来れば、「休み」が与えられるという約束である。

◆詩篇に戻ると、安息について、詩篇3篇、4篇に驚くべきあかしが記されている。「私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから。」(3篇5節)「あなたは、私の苦しみのときに、ゆとり(くつろぎ)を与えてくださいました。」(4篇1節)「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」(4篇8節)

◆特に詩篇3篇はダビデが自分の息子アブシャロムに裏切られて、都落ちしたことがその背景にある。アブシャロムは父ダビデに謀反を起こし、4年がかりで人の心を盗み、自分の方へなびかせ、ダビデの有力な部下まで味方につけて旗揚げし、エルサレムを乗っ取った。ダビデはわずかな者を連れて裸足で逃げたが、そのとき昔の敵サウルの一族シムイが、ダビデに石を投げつけ、中傷し、口汚くののした。ダビデの人生の中でこれほど絶望的なことはなかった。人々はみな「今度こそは、ダビデに救いはない」と考えた。しかし3節、「しかし、主よ」である。「あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です」とダビデは主を賛美した。・・そして「私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから」と告白している。何と言う安息、何と言う魂の安らぎ、これこそ多くの人々が求めているものである。

◆ある意味において、人生の最大の課題はどのようにして身を横たえて休息し、また眠ることができるかである。身を横たえることはすべての者にできるが、問題は安らかに眠れるかどうかである。この詩篇作者は自分が敵によって、また苦難や試練によって取り囲まれていると述べている。にもかかわらず、主を信頼するゆえに身を横たえて安心して眠ることができたとかかしている。翌朝には平安な心で気分爽快に目覚めることが出来る。なぜそうできるのか。この点ほどクリスチャンの立場を徹底的に試みる要素は他にはない。

◆多様化した現代の世相は、私たちの安眠と快い目覚めを奪っている。極度に進んだ文明の便利さの中で、それとは裏腹になんと複雑な問題が私たちから平安を奪い、安眠を妨げてい

ることか。将来に対する方向や先行きがはっきりしないで、どうして安心して休んでいただけるだろうか。ましてや永遠の行き先が決まっていないで、だれが平安でいただけるだろうか。このような恐れに対して、私の羊飼いは私を真の安息、緑の牧場といこいのほとりに導こうとされるのである。

2. 真の安息を得る二つの秘訣

(1) 主イエスとくびきを共にすること

◆真の安息があることが約束されている。しかしそれをいかにして自分のものとすることができるのか。マタイ福音書におけるイエスの招きのことばの後半を目に留めよう。そこにはこう記されている。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい、そうすればたましいに安らぎが来ます。」そして、「わたしのくびきは負いやすい」とある。

◆「わたしのもとに来るだけでなく、わたしのくびきを共に負いなさい。そうすれば、あなたのたましいに安らぎが来ます」と言っておられる。当時、田畑を耕すときに、牛とかるばが重荷を軽くする目的で二頭立てしようとするときに、首の辺りにくびきをかませた。このとき、少しでもそのくびきが合わなければどちらかがより負担を強いられるだけでなく、力を発揮することができなくなる。くびきは双方がぴったりと合っていなければならない。

◆イエスが「わたしのくびきを負いなさい。しかもわたしのくびきは負いやすい」と言われたが、それはイエスがくびきを私たちのサイズにぴったりと合わせてくださるのである。私たちがイエスのくびきに合わせるようにがんばるのではなく、イエスの方が私たちのサイズにぴったりあわせてくださる。その意味でイエスは紳士なのである。「わたしは心優しく、へりくだっているから」と言われた。

◆多くの人々は「優しさ」を求めている。優しさとは人の憂いと書く。したがって、優しさとは人の憂いをよく知っている人という意味といえる。現代の若者たちの間に「優しさの病理」が広がっている。その優しさとは、本当の優しさではなく、あくまでも自分を受け入れてもらうための優しさである。その優しさに騙される人は多い。真の優しさとは多くの人の憂いを経験したところからにじみ出てくる優しさである。老人の優しさの秘訣はここにある。イエスも同じである。憂いの経験を通して、私たちの弱さを知り、理解してくださる方である。イエスの生涯は人が経験する様々な憂いを通させられた。そんな思いやりのある方との関係を持つことが「くびきを負う」ことなのである。ここに真の安らぎの秘訣がある。心優しい主イエスとの関係を豊かに持つこと、これこそイエスとくびきを共に負うことである。

◆そのような関わりをもって、イエスは「わたしから学びなさい(学び続けなさい)」と言われた。「学ぶ」とは弟子が師に倣うことを意味する。昔、師は弟子たちに直接教えることはなかった。したがって弟子は師のしていることを良く見て、賢く、そこから秘訣を盗まなければならなかった。よく盗むことができた弟子こそ良い弟子となった。私たちもイエスの行動パターンを、その秘訣を賢く盗まなければならない。盗むとは、とどのつまり、発見することなのである。・・・例えば、イエスの働きの背後にある祈りの生活・・・といった具合に。

(2) 感謝をもってささげる祈りと願い

◆しかしそうは言っても「思い煩い」をコントロールすることはなかなか難しい。使徒パウロは波乱の人生を送った。多くの困難や先が見えない状況、四面楚歌を経験した。その彼がピリピ4章6節でこう言っている。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」と。

◆彼は、ただ単に「思い煩うな」と言うだけでなく、「あらゆる場合に、感謝をもって」と書き添えている。ここに秘訣があることを教えている。私たちが思い煩いの中にひとたび引き込まれると感謝ができなくなる。思い煩いは私たちの心と思いから起こってくるもので、それをコントロールすることは難しい。想像力の豊かな人であればあるほど、この思い煩いから解放されることは難しくなる。思い煩いから解放されるためには、パウロが勧めるように「あらゆる場合に、感謝をもって祈る」訓練が必要なのである。そうすることによって、「人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いを守ってくれる」のである。とにかく、感謝することが先決なのである。

◆「緑の牧場といこいの水のほとり」で安心して身を横たえる恵みにあずかるために、あらゆる場合に、あらゆることを神に感謝することを実践し、訓練することを始めよう。

たましいのリニューアル

主は私のたましいを生き返らせ、(3節 a)

He gives me new strength.

<はじめに>

◆2節の主題はたましいの<安息>であったが、3節の前半の主題はたましいの<生き返り>ということである。つまり、たましいがリフレッシュされること、リニューアルされることである。

◆時折、新聞の折り込みに「店閉い! 閉店セール」という広告が入っている。これは店が倒産したのではなく、一度は店を閉めて、店内を改装したり、品物を並び替えたり、品物を一新させたりしてリニューアルをはかり、再度、開店するための「店閉い」である。その目的とするところは、第一にお客にあきらめられないため、第二は店の経営意欲を刷新するためである。パチンコ店などでは、しばしば「リニューアル、オープン」の広告を出して新しいお客を呼び寄せようとやっきになっている。リニューアルする動機は、このままではダメだという危機感が根底にある。少しでも利益を生むために、この世の人々はいろいろと研究し、努力しているのである。

◆今日の教会の問題はこの危機感が希薄なことである。神の教会がこの世にあって世の光、地の塩としての役割を果たし、影響力を及ぼしていくためには聖霊によるリニューアルは欠かせない。ところが、私たちの多くは旧態依然として保守的で、新しい聖霊の風を拒むところがある。歴史が古ければ古いほどリニューアルすることはとても難しくなり、教会は宗教家の集団と化していく。礼拝、祈り、賛美に生きたいのちがなく、形式だけが存在し、そこには主の生ける臨在が感じられない。そしてそのことに対する危機感が見られないのである。教会のレベルにおいても、クリスチャン個人のレベルにおいても、もし霊的な刷新の必要性を感じる事がなければ、そこには将来の展望はない。礼拝する心、主をあかしする力、主への献身の思いの一新、神と人を愛する力、将来に対する新しい希望の刷新の必要を感じなければ、この世においての教会の存在価値はない。クリスチャンの中には、できることなら自分が一新して出直したい、リニューアルしたい・そんな思いを持っている人は多い。しかし、どうすればよいのか分からずに、ただ流されるままに生きていることが多いのである。しかし詩篇23篇3節の前半に、主の恵みが記されている。ダビデはこうあかししている。「主は私のたましいを生き返らせ」てくださる、と。

1. 生ける神の臨在への渇き

◆「生き返らせ」ということばを調べると、このことばには様々なニュアンスがあることを知らされる。

(1) リフレッシュ (refresh)

- a. 睡眠を少しとることで、頭がすっきりする。
- b. 労働の後にシャワーを浴びて心身さわやかにする。(仕事の合間の一服、仕事の後の一杯)
- c. 喉の渇きを一杯の水で潤し、気を取り戻す。
- d. 渇ききった大地に待望の雨が降ることによって草花が生き返る。
- e. 休息を取って充電する。

(2) リニューアル (renewal)

- a. 再開する。
- b. 更新、刷新、回復、復興、一新、再建、・・・心機一転。
- c. 補充
- d. 若さや力を取り戻す

(3) リバイバル (revival)

- a. 生き返らせること
- b. 革新
- c. 力を与え生き生きとさせること

◆自然界はリフレッシュする力に満ちている。例えば、森林火災によって森林の資源が燃え失せたとしても、それはすぐに再生がなされる。しかし人為的に森林を伐採するならば、自然破壊が起こって、そこは荒地となり、やがては砂漠化する。なぜなら、自然界には自然界の再生システム、治癒力あるからである。

◆霊的な世界においても、リフレッシュする力、リニューアルする力が備えられている。

(1)イザヤ書35章1-7節

「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。・・・野の水がわき出し、荒地に 川が流れるからだ。焼けた地は沢となり、潤いのない地は水のわく所となり・・・」

(2)イザヤ書40章29-31節

「あなたは知らないのか、聞いていないのか。(主がどのようなお方であるかを)。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。」

走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」

(3)イザヤ書43章19-21節

「見よ。わたしは新しいことをする。今、それが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。・・・わたしが荒野に水をわき出させ、荒地に川を流し、わたしの民、わたしの選んだ者に飲ませるからだ。わたしのために造ったこの民は、わたしの栄誉を宣べ伝えよう。」

(4)ヨエル書2章25節

「いなご、・・・が食い尽くした年々をわたしはあなたがたに償おう」

◆特に、(4)には、自分の犯した失敗で間違った決断をし、自分はもうだめだと半ばあきらめている者に対する神の励ましがある。神に立ち返るならば、もう一度、「わたしに期待するならば、わたしは失われた年々を償おう」と。

2. リニューアルのためになすべきことは、「主の御前に静まること」

(1) 静思の時

◆「主はわたしのたましいを生き返らせ」というところを、NKJVでは **He gives me new strength** となっている。「新しい力」である。この力を得るために必要なことは何か。イザヤ書41章1節には「主の前に静まれ」と語られている。行動を起こす前に、新しい力を得ること。そのためになすべきことは「主の前に静まる」ということである。アンドリュー・マーレーは、霊的に衰退する原因の第一は、静思の時をなおざりにすることだとしている。ペテロは救いにあずかった者に対して「生まれただけの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と勧告している。神のことばは「霊であり、(人を生かす)いのち」そのものなのである。「主の教えは完全で、たましいを生き返らせ」(詩篇19篇7節)る、とある。

(2) 優先順位

◆私たちは先ず「主の前に静まって」主のことばを聞くということを習慣としなければならない。それなしには、霊的な回復、一新、リニュアル、継続的な油注ぎを望むことはできないのである。「主の前に静まる」とは、換言すれば「主を知ること」を追い求めることである。ダビデもパウロも、その模範者であった。ダビデは晩年、自分の後継者となるソロモンに対してこう述べている。「わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。」(1歴代誌28章9節)。ここでダビデは「神に

対する優先順位」を教えている。つまり、「神に仕える」前に、「神を知ること」の大切さを。

(3) 渇き

◆ダビデは詩篇42篇でこう記している。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています」(1-2節)。ここには、神の臨在を慕い求める強烈なたましいの渇きがある。これが大切なのである。もっとも、この渇きは聖霊によって引き起こされるものである。神は私たちをリニューアルし、神のすべての良いもので私たちを一新させるために、私たちのたましいに渇きを与えられるのである。この渇きを与えられる者は幸いである。なぜなら、神のすべての祝福は渇く者に注がれるからである。イエスは言われた。「だれでも渇いているならば、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているように、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」と。

◆ペンサコーラの賛美の中に「もっと栄光、もっと力、もっと聖霊を、私の心を満たして、主よ。」というのがある。この渴望は聖霊に満たされれば満たされるほど強くなっていくものである。「その人の心の奥底から生ける水が流れ出るようになる」・・・これがすべてなのである。「生ける水」とは聖霊のことである。これがなければすべての営みは無意味である。なぜなら「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません」「御霊は生かします」「主は御霊です。そして御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、神に向かって心開かれて、栄光から栄光へ、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(II コリント 3章6節、17～18節)。

(4) 祈りの生活を優先するライフ・スタイルの一新

◆静思の時を持つとは「祈りの生活をする」ことである。そのためには、祈りの生活のためにライフ・スタイルを一新することが不可欠。この一新によって豊かないのちがもたらされ、私たちのたましいは刷新され、生き返るからである。他にも「主の前に静まる」とは以下のようなことを意味する。

a. 告白していない罪の有無を確かめる

◆人間同士でも、ささいなことで仲違いをした場合、顔を合わせなくなるものである。たとえ、顔を見合わせたとしても、以前のような暖かさや親密さはなくなる。そこには距離と冷たさと遠慮がある。仲違いの原因をさぐり、それを認め、すなおに告白して誤解を解かなければ心の燃りは戻せない。ましてや私たちの神との関係も同じである。

b. この世とのつき合いを吟味する

◆つまらない会話、冗談、おしゃべり、空虚な会話などが多ければ、霊的な健康は損なわれる。この種の「つき合い」に多くの時間を費やすことによって、神の与える多くのいのちを失ってしまうのである。

c. 不従順な態度を改める

◆不従順な態度も霊的ないのちを衰弱させる。この従順は神に立てられた権威に対する従順も含んでいる。タコを天高くあげるために結びつけられている糸がある。この糸は従順の糸である。その糸とタコが結びついているとき、タコは天高く舞い上がる。しかし、そのタコが糸の支配を拒み、それから自由になろうとすると、タコは自由になるところか、下に落ちてしまう。自由を求めたのに、霊的には落下してしまう。タコにとって糸は自分を天高く舞い上がらせる、なくてはならないものなのである。この糸は従順という糸なのである。神に従順な者は神から永遠に祝福される。それが聖書のメッセージ。私たちはそれぞれなんらかの形で、神の立てられた権威の下に置かれている。その権威を認め、それに反抗することなく、従順な態度を取るとき、自分でも思いもよらない祝福の道を歩むようになるのである。

神のご計画と導き

御名のために、私を義の道に導かれます。

He guides me in the right paths, /as he has promised.(3b)

<はじめに>

◆3節後半の主題は<神の導き>である。神に導かれる生涯ほどすばらしいものはない。天の父は私たちひとりひとりに対して神の偉大なご計画をもっており、そこには深い御旨がある。3節後半には、主はご自身の御名にかけて「義の道」に導かれる、とある。「義の道」とは何を意味するのか。義を神との正しい関わりという意味で理解するならば、神のみこころ、神のご計画、そしてそこへと至るすべての道は「義の道」と言える。それは、私たちにとって、私たちの救いを達成する道であり、神の目から見るならば、神の栄光が現わされる道と言える。御名のために、義(神の目的、ご計画、みこころ)を実現するのは神であり、そのために神は私たちを日々、継続的に導こうとしておられるのである。

◆聖書の中には、神の導きに関して、驚くほど多くの例証、約束、真理があかじされている。またその導きはスリルに満ちている。主の導きは、神の子に与えられた特権であり、また神の愛のプレゼントである。なぜなら、神の導きは、あなたが実り豊かな生涯を送るために、神が愛のうちに備えてくださっているものだからである。主が私たちを日々、導いてくださっているという事実を知ることが、私たちの信仰の歩みにおいて、喜びと緊張をもたらすのである。

1. すべてのことを働かせて益としてくださる神

◆映画を見るとき、見る者にとって先がどうなるのかわからない場合にも、あるいはその結末を知っていたとしても、そのストーリーの展開の面白さに心を奪われる。聖書中の人物において、旧約のヨセフやダビデ、新約のパウロの結末が分かっている、その展開の中に神がどのように介入して導かれたかを学ぶことは、大きな益がある。彼らに共通していることは、自分の生涯が比較的早い時期に、夢や幻、あるいは人を通して預言されている。

◆ヨセフは夢を見た。その夢とは・・・・・・・・

「畑で束をたばねていると、突然、自分の束が立ち上がり、しかもまっすぐに立っている。そして、見ていると、他の兄たちの束がその自分の束の回りに来て、おじぎをしている」という夢であった。兄たちはヨセフが見た夢の話を聞いて、「おまえは私たちを治める王になる

うとするのか。私たちを支配するのか」と言い、ヨセフをますます憎むようになった。さらに、ヨセフは「太陽のまわりに、月と11の星が自分にひれ伏して拝んでいる」夢を見た。この夢を父や兄たちに話したとき、父も「私や、おまえの母親、兄さんたちが、おまえのところに行って、地にひれ伏しておまえを拝むとでもいうのか」と叱かった。兄たちは、ますますヨセフを憎んで、結果的に、ヨセフを売った。兄たちは自分で知らずにヨセフの夢を実現する羽目となってしまった。それからというもの、ヨセフに起こるすべてのことは、ことごとく、彼が見た夢を実現するものとなっていく。

◆人間的に見るならば、兄たちの憎しみがあり、父の偏愛があった。妬みをかったヨセフは、兄たちによって奴隷として売られた。ヨセフは奴隷としてポティファルというエジプトの主人のもとで忠実に仕えることによってその家のすべての管理を任されるようになった。にもかかわらず、奥さんの誘惑を退けたことで、逆に、罪の濡れ衣を着せられて、牢獄に入れられる。なんとも不可解なストーリーが展開していく。そして牢獄の中で、あるときパロの夢を解き明かしたことによって、次第にパロに信頼され、やがてその牢獄から解放されただけでなく、エジプトの総理大臣となって国の政治を任されるほどになっていった。つまり、エジプト全土の実質上の統治者とされたのである。そこに、ヨセフの父や兄たちが住むカナン地の食糧危機がおとずれ、彼らはエジプトに助けを求めに行かざるを得なかった。そして夢が実現する。彼らが頭をさげた相手は、なんと自分たちが売った弟ヨセフだったのである。

◆いったい、だれがこんなストーリーを考えついたのか。神は人間的な失敗や過ちさえも、有益なものとしてご自身の計画の中に織り込んでしまわれる方であることが分かる。ヨセフは創世記50章で、自分を売った兄たちに向かってこう言った。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを良いことのための計らいとなさいました」と。この新約版はローマ人への手紙8章28節である。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私は知っています」

◆今日、多くの人が自分の将来、隠された将来について知ろうとして、占いやオカルトなどに走っている。イスラエルの最初の王サウルも、神の御旨を求めないで、間違った方法で将来の導きを求めようとした。1歴代誌10章13-14節参照。サウル王が自ら死を招いた原因がそこに記されている。「サウルは主に逆らったみずからの不信の罪のために死んだ。主のことばを守らず、そのうえ、霊媒によって伺いを立て、主に尋ねなかった。それで、主は彼を殺し、王位をエッサイの子ダビデに回された。」

◆詩篇23篇3節後半でダビデは「主は、・・御名のために、私を義の道に導かれます」と確信をもって語っている。イザヤ58章11節にも「主は常に(継続的に)、あなたを導き」とある。神はご自身の御名にかけて、神の目的、神の御旨を実現させるために私たちを導かれる。神が導かれるのは私たちが神の子である証拠である。それゆえ、私たちは神の導きを期待し、

待ち望まなければならない。

2. 神の導きを確認するための手引き

◆ある人々はいとも簡単に「神に導かれた」と言って判断し、行動を起こしたりする。しかし私たちは本当に神の導きかどうかを吟味する必要がある。新約聖書の使徒の働きは神の導きの例証の宝庫である。ペテロが異邦人(ユダヤ人以外の民)を受け入れるという神のみこころをしっかりと受け留めるためには、特別な神の導きが必要であった。そのために使徒の働きでは実に2章(11章、12章)が費やされている。

◆ここで私たちが神の導きというものを確認するための手引きとして、使徒の働き16章を通してパウロに与えられた神の導きに目を留めたい。

(1) マルコと呼ばれるヨハネのことでパウロとバルナバとの間に激しい反目が起こる。そのことによって二人は分かれることになる。パウロは新たなパートナーが与えられる(15章39-40節)。ちなみにバルナバはパウロを引き出した人であった。

(2) 新しい働きが教会の祝福によって押し出されるが、その働きは行き詰まる(6-8節)。それは「聖霊によって禁じられた」とある。何があったのかは具体的には記されていない。

(3) ある夜、パウロが祈っていると幻を見た(「助けて欲しい」との懇願)。

(4) パウロに確信が与えられる。「確信」ということばは様々な状況を考えて総合的に判断し、選択することを意味している。

- a. 自分の召命
- b. 自分を支えるスタッフの付与
- c. 教会会議の決定に従った歩み
- d. 聖霊の禁止(行き詰まり状況)
- e. 祈ったこと
- f. 幻が与えられたこと
- g. 必然的なあかし・・・祈り場でルデヤが救われたこと

(5) 神の導きのあかし。つまり、ピリピ教会の誕生によって後のパウロの働きを経済的な面から支援する教会となる。

◆神の導きの原則は、以下のようにまとめられる。

(1) 自分から神の計画を実現しようとしないうこと。

- (2) 神の導きはしばしば向こうからやってくること。
- (3) そこには必然性があること。
- (4) 神のみこころであるなら、心に平安が来ること。
- (5) 神のみこころでなければなんらかの形でその道が閉ざされること。
- (6) 神の導きと信じて進んでいても、困難が立ちはだかるが、思いもよらない道が開かれてくること。
- (7) 他の人が聞いても、神の導きだと判断できること。
- (8) 導きの継続性がある。何か突飛な、断続的なものではないこと。
- (9) 後に、神の祝福のしきたりが見えること。

などをあげることができる。

◆私たちの羊飼いは私たちを「御名にかけて、義の道に日々導かれる」のである。それゆえ、神の導きを識別する能力を身につけたいものである。

主の臨在の約束とその祝福

たとえ、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませんが、

あなたが私とともにおられますから。(4節 a)

Even if I go through the deepest darkness, I will not be afraid, Lord,
for you are with me. (4a)

<はじめに>

◆ 4節前半の主題は<主の臨在の約束とその祝福>である。賛美歌に、「臨在、わが力・・・」というのがある。臨在こそわが力、わがすべて、これがなければすべては失われたものである。臨在とは、主がともにおられるということである。ダビデは「たとえ、死の陰の谷を歩むとも私はわざわいを恐れない」と言っている。「死の陰とは」文字通り、死という現実、死の淵、だれも助けることができない孤独で、絶望的な状況を意味することばである。そんな状況にあったとしても、私はわざわいを恐れない。なぜなら、「主が私とともにおられるから」である。まさに、人生の逆転を象徴することばである。

◆ 「ともにいる」とは、単に、一緒に仲良く存在しているというような次元ではない。臨在の事実は、私たちを心躍らせるような、ウキウキ・ドキドキ・ワクワクな人生を保障する。2000年の夏、K 姉が胃がんと診断されてから、私と家内はしばしば訪問した。その訪問の度に、繰り返し伝えたメッセージは「主が姉妹と共におられる」であった。その祝福の結果は、ガンであるにもかかわらず、最後まで、姉妹がガンによる痛みを感じることはなかったことである。不思議というほかなかった。主の臨在による平安の祝福だと信じる。それは彼女が主の恵みを覚えさせられるための主の愛であった。彼女ははっきりと「私は死が恐くない」と言い放った。なぜなら、行く所がはっきりしているからだと言う。彼女は明確な天国信仰を持っていた。死の向こうは、涙も、死も、悲しみも、苦しみもない。主とともに住む永遠の新しい住まいがある。死はその通過点でしかない。この確信がなければ、死ぬことはおそろしく恐ろしいに違いない。自分のしたことすべてがさらけ出されて、さばかれるからである。しかし主にある者はイエスの血潮がある。主の血潮と主のとりなしにより、私たちの罪は決してさばかれることはないのである。

◆ 主の臨在の約束は、聖書のはじまりからおわりまで、実に聖書全体に及んでいる。臨在の約束がどんなにすばらしいものであるかを、特に、創世記の中の人物の中から選び、その祝福について瞑想してみたい。

1. 祝福の連続性と未広がり・・・イサクに対して(創世記26章)

◆父アブラハムは飢饉のときエジプトに下った。しかし同じ飢饉のとき、イサクに対して主はこう言われた。「エジプトに下ってはならない。わたしが示す地に住みなさい。あなたはこの地(ゲラルのペリシテ人の王、アビメレク)に滞在しなさい。わたしはあなたとともにいてあなたを祝福しよう。・・・(子孫繁栄の約束)・・・イサクはその地に種を蒔き、その年に百倍の収穫を見た。主が彼を祝福してくださったからである。こうして、この人は富み、ますます栄えて、非常に裕福になった。このことは、ペリシテ人の妬みを買ひ、結果的にその地を出なければならなくなった。井戸のことで争いが続いたが、イサクは争いを避けて、新たな井戸を探し、ベエル・シェバに上る途中、その夜、主はイサクに現われて仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしはあなたとともにいる。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加えよう。わたしのしもべアブラハムのゆえに。」

◆主の臨在の約束は、単に、個人的な祝福にとどまらず、よりグローバルな、未広がり祝福をもたらす。そこには連続性がある。それは神の遠大な、かつ偉大な計画に従って与えられる。それは個人特有の資格ではなく、イサクの場合、父アブラハムの信仰と従順のゆえに、その連続性の中で祝福を受けた。私たちの場合は、長兄であるイエスのゆえに祝福されるのである。

◆臨在の約束とその祝福の原則とは・・・

- (1) 連続性があること。つまり、単に個人的レベルで終わることなく未広がりであること。
 - (2) 神の一方的な恵みであること。つまり、人間的な資質や功績によらないこと。
 - (3) どこにいても守られること。どんな状況の中を通らせられたとしても決して見捨てられたりしないこと。むしろ、すべてのこと(失敗の痛み、人間の罪や悪さをも)が益とされること。
 - (4) 世の終わりまで決して変わらないこと。
- ・・・である。

2. 祝福の一方性と守り・・・ヤコブに対して(創世記28章)

◆「祝福の連続性」はイサクの次の世代ヤコブに引き継がれる。ヤコブは「アーカブ」(かかとを意味する)を語源とする名前で、人を出し抜き、狡猾で、抜け目のない性格をもった人物である。彼は一杯の食べ物で兄から「長子の権利」を奪い取り、父イサクをだまして長子の祝福を奪った。兄エソウは当然のごとく怒った。それゆえヤコブはそこにいることができずに、裸同然でベエル・シェバの家を出る。母リベカはヤコブに兄の怒りがおさまるまで、自分の兄ラバンのもとへ身を寄せて、そこでラバンの娘たちから妻をめとるようにと提言する。

◆実は、母リベカが胎に二人の子を宿したとき、すでに腹の中でぶつかり合っていた。彼女は主のみこころを求めた。すると、主は彼女に現われてこう言った。「二つの国があなたの胎

内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える」と。マラキ書 1 章を見ると、主はこう言っている。「わたしはヤコブを愛した。わたしはエソウを憎み・・・」と。人間的に考えるならば、つまずきを与えるような表現である。しかし聖書ははっきりとしている。愛するか、さもなくば憎むのである。イエスも「だれもふたりの主人に仕えることはできない。なぜなら、一方を憎んで、他方を愛するからです」と語っている。聖書の世界では、一方を愛することは、他方を憎むことなのである。もっとも、「愛する」とは「選ぶ」と同義である。とすれば、主はヤコブを「選び」、エソウを「選ばなかった」ということになる。

◆選ぶの理由は、ヤコブが優れてりっぱな人物だったからではない。むしろ反対であった。人をだまし、欺き、自己中心的で、自分さえ良ければという面が多分にあった。しかし主は、彼を選び、彼を愛したのである。

◆ヤコブが父の家を出たとき、ある夜、彼は夢を見た。それは不思議な夢であった。「見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂きは天に届き、見よ、御使いたちが、そのはしごを上り下りしている。」主はそのかたわらに立っておられた。主は言われた。「わたしは、あなたの父アブラハム、イサクの神である。あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決して、あなたを見捨てない。」と。(28章 13-15 節)

◆この臨在の約束は、その個人的な資質や力量や性格によるものではなく、神の一方的な恵みである。ヤコブに対する神の臨在の約束とその祝福がどのように実現していったかは、その後の彼の記事を読めば分かる。彼はやがて「祝福を奪う者」から「祝福を与える者」へと変えられていったのである。

◆ラバンのもとでもヤコブはだまし、だまされながらも、多くの財産(二人の妻・レアとラケル、そしてその奴隷たちから生まれた 13 人の子どもたち、家畜、しもべたち・・・等)を築いていった。これは主が彼とともにいるという約束の結果であった。多くの民が生まれ出るという子孫繁栄の主の約束は、ヤコブが自分で計画して実現したものではない。ヤコブがラバンにだまされて、自分が愛したラケルではなく、姉のレアと結婚する羽目になる。仕方なく、妹のラケルを得るために、彼はさらに 7 年間ラバンのもとで働き、ラケルと結婚することができた。しかしそうすると、二人の妻との間に、妻としての地位をかけた戦いが始まり、レアは自分の奴隷によってヤコブの子を得た。ラケルも負けじと、自分の奴隷を夫に与えて子を得ようとする。そうした女の戦いが多くの子を得る結果となった。だれがこんなことを考えることができたであろうか。しかもそれはある意味で合意の上でなされていったのである。

◆このようにしてヤコブは多くのものを得、神がベテルで約束されたことが実現したのであ

る。彼は決して見捨てられることはなかった。主がともにおられるということはなんとすばらしいことか。

◆**ヨセフの生涯**においても、聖書は彼の生涯のさまざまな局面で、「主が彼とともにおられた」と記されている。ヨセフがエジプトへ連れて行かれたとき、彼はパロの侍従長だったポティファルというエジプト人の主人に買い取られた。これはヨセフにとって幸運であった。聖書にこう記されている。創世記39章2-4節。「主がヨセフとともにおられ、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。そこでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。」ところがこれで終わらない。5節を見よ。主人が彼にその家と全財産とを管理させた時から、主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで主の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。彼はヨセフの手に全財産をゆだね、自分の食べる食物以外には、何も気を使わなかった。なぜなら、ヨセフがすべてのことをしてくれたからである。大変な信用である。主がともにいるという祝福は、人々から多大な信用を得るほどのものである。黙っていても、人の上に立つ存在となっていくのである。自分からではない、主がともにおられるからである。

◆監獄に入れられてからも、主が彼とともにおられたことで恵みが施された。ここでもヨセフは監獄の長の心にかなうようにされ、監獄の中のすべてのことを管理するようになったのである。管理する賜物はヨセフに与えられた賜物であった。主がともにおられるという祝福は、その人に与えられている賜物がどこにあっても引き出され、用いられていくということである。ヨセフは自分に与えられている賜物が、神のご計画の中でどのように用いられていくのか、その真相は知らなかったに違いない。彼はただ主の御手の中に自分を置いて、主を信頼して、その与えられた状況の中で忠実に仕えようとしただけであった。その結果が、他の人、特にヨセフの場合は、自分の上に立つ人から顧みられて、主のご計画を実現する者とされたのである。

◆ヨセフに対する主の臨在の祝福。ここにも祝福の<連続性>を見ることが出来る。アブラハムからはじまって、イサク、ヤコブ、そしてヨセフ、さらにはモーセ、ヨシユア、**ダビデ**と、祝福の本流の中に生きることが出来る恵みは、ただ主がともにいてくださるからである。あなたに対しても、主は祝福の本流の中に生きることが望んでおられる。なぜなら、私たちはキリストにあって、「祝福を受け継ぐために召された」者(ペテロ第一、3章9節)だからである。

◆「主がわたしとともにいてくださる」という約束とその祝福を心から信じよう。この確信がなければ、神からの召しを成し遂げていくことはとうてい出来ない。もし信じるなら、ダビデのように「たとい、死の陰の谷を歩むとも、私はわざわざを恐れませんが。」と告白できるのである。私たちのいのちも、望みも、すべて、「世の終わりまでわたしはあなたとともにいる」と約束された主の御手にゆだねて、主に信頼して歩む者になりたい。

主のむちと杖とは私の慰め

あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。(4節b)
Your shepherd's rod and staff protect me.(4b)

<はじめに>

◆4節後半の主題は<神の慰め>である。ダビデは神のむちと杖が、慰めをもたらすと告白している。この神のむち、神の杖とはいったい何であろうか。

1. 神の主権を認めること

◆聖書全般にわたって「むち」と「杖」とを明確に区別することは難しい。両者は使用目的によって、同じ語がどちらにも訳出されているからである。「むち」は「矯正する」ため、または<懲らしめる>ために用いられたりする。「杖」(ヘブル語では四つの言葉があるが、その意味はほとんど同じである)は、木の枝や細い幹などから作られ、それを使って人が歩くのに用いられたりするが、羊飼いの「杖」は羊を「保護する」ために用いられる。それは同時に敵に対する武器ともなる。

◆主イエスは終わりの日に「鉄の杖」をもって全世界の民を治められることが預言されている。詩篇2篇9節、黙示録2章27節、12章5節、19章15節参照。結論的に言うなら、神と関係して用いられる「むち」と「杖」ということばは、一貫して<権威の象徴>として用いられている。ダビデが23篇で「主はむちと杖をもって」ということばの意味するところは、神が主権的な権威をもって、この世界を、歴史を、国を、また私たちの存在とその人生のすべてを支配し、治めておられるという告白なのである。

◆ヘブル書12章5-12節にはこう記されている。

「『わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。』 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。…霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときには喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるのですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせるのです。ですから、弱った手と衰えたひざを、まっすぐにしなさい。」

◆こうした霊の父の主権的な支配を知ることは、私たちに新たな生き方を与えるはずである。アモス1章5節、8節の欄外注には、「王位に就いている者」は、同時に「杖を持つ者」でもあると記されている。神の主権的な権威を認め、その方の支配の中に生かされていることを信じることの中に、実は、真の慰めがあるのである。逆に言うなら、神の主権的な支配を信じることなしに、真の慰めを経験することはできないのである。

◆聖書にはいろいろな「慰め」があるが、人の存在そのものが、ある人々にとって慰めとなっている場合がある。

(1) ノアが生まれた時、その父メクは「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、労苦しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるだろう」(創世記5章29節)

(2) イサクはリベカをめとり、彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した、イサクは、母のなきあと、慰めを得た。(創世記24章67節)

(3) キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと「慰め」の子)と呼ばれていたヨセフも、畑を持っていたので、それを売り、その代金を持ってきて、使徒たちの足もとに置いた。(使徒4章36節)

(4) パウロはピレモンに宛てた手紙の中でこう記している。「私はあなたの愛から多くの喜びと慰めを受けました。それは、聖徒たちの心が、あなたによって力づけられたからです。」(ピレモン7節)

2. イザヤ書40章に見る神の慰め

◆イザヤ書40章の最後の聖句、「主を待ち望む者は、新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ」は有名な聖句の一つ。多くの者がこのみことばで励まされてきた。このみことばは、自らの偶像礼拝の罪ゆえに、神の懲らしめの杖(おち)によって、バビロンの捕囚の民となり、悲惨と辱しめを経験した神の民イスラエルに対して語られたみことばである。神は決してご自身の民を捨てられたわけではない。バビロン捕囚の出来事は、彼らが、再び、真の神の民となるべく期待された神の愛の懲らしめだったのである。神の民が捕囚の地で気落ちし、自暴自棄に陥らないように、あらかじめ、神からその民に慰めのことばを、預言者イザヤを通して語っているのがこのイザヤ書40章である。

◆『「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。』どのようにして慰めるのか。それはまず、エルサレムに優しく語りかけ、呼びかけることであった。

(1) 解放による慰め・・・「その労苦は終わり、その咎は償われた、そのすべての罪に引き換え、二倍のものを主の手から受けた」これはペルシャ王クロスによって実現する。＜勧告＞「主の道を整えよ。」

(2) 牧者による慰め…神は羊飼いのように、ご自身の民を飼い、御腕に引き寄せ、ふところに抱き、やさしく導くとの約束。

(3) 創造者による慰め・・・「だれが、これこれのことをしたのか」「だれがこれらを創造したのか」「知らないのか、聞かないのか、悟らないのか」・とたたみかける反語表現によって、人間の無力さと神の全知全能のみわざに目を向けさせようとしている。＜勧告＞「目を高く上げて、だれがこれを創造したかを見よ。目があっても見えない、耳があっても聞こえない、口があっても語れない偶像により頼むな。わたしはあなたを造った主である」との宣言。

(4) 永遠者による慰め・・・「なにゆえ、あなたは『わたしの訴えは見過ごしにされている』と言い張るのか。主は永遠の神、その英知は計り知れないのだ。「人は草、その栄光は、みな野の草のよう。しかし神のことは永遠に堅く立つ」と。＜勧告＞「主を待ち望め」なぜなら、主を待ち望む者は、新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れることがないから。

◆これぞ「神の与える慰め」である。神の与える慰めとは、困難を避けるのではなく、困難の中を通過させる力を与えることなのである。

3. 使徒パウロが経験した神の慰め

◆聖書の中で「慰め」ということばを見ると、必ずと言っていいほど、人間が経験する苦しみ、困難、悲しみ、寂しさ、失望といった状況が前提となっている。たとえば、……………

a. 「私のうちで思い煩いが増すときに、あなたの慰めが、私のたましいを喜ばしてくださいますように。」(詩篇94篇19節)

b. 「これこそ(主のみことばこそ)悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。」(詩篇119篇50節)

c. 「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」(マタイ5章4節)

d. 「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神はどのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にある人をも慰めることができるのです。それは、私たちにキリストの苦難が溢れているように、慰めもまた

キリストによってあふれているからです。もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。・・・あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めをもともにしていることを、私たちは知っているからです。」(コリント第二、1章)

- e. 「私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。・私たちの身には少しのやすらぎもなく、さまざまな苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。」(同、7章4節-7節)

◆コリント第二、7章での慰めは、コリント教会とパウロの関係が回復したことによるものである。パウロは使徒としての厳しい指導をしたため、人々から誤解され、彼らとの関係に誤解や不信感があった。しかし、テトスの仲介によってそうしたものが氷解し、両者に信頼関係が回復した。「・・・こつというわけで私たちは慰めを受けました。」(同、13節)とパウロは述べている。

◆コリント第二の手紙1章においては、パウロは「すべての慰めの神」と告白している。なぜなら、パウロ自身が神の慰めを数多く経験した人だからである。そしてパウロは自分だけでなく、他の人もこの神の慰めが与えられるようにと祈っている。テサロニケ第二、2章16-17節でこう述べている。

「どうか、私たちの主イエス・キリストであり、私たちの父なる神である方、すなわち、私たちが愛し、恵みによって、永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方ご自身が、あらゆる良いわざとことばに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。」

ウェルカム・ホーム (1)

私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、(5節 a)

You prepare a banquet for me,
where all my enemies can see me; (5a)

<はじめに>

◆5節からは、これまでと違っている。それは主と私の関係が、羊飼いと羊の関係から自分の食卓に招く**主人と客人との関係**に変わっていることである。

◆23篇は、常に、私たちの主なる神がどのような方であるかに焦点が当てられている。5節の主題は<**神の歓迎**>である。しかも気前の良い歓迎なのである。主の好意と親切に満ちた歓迎を受け続けたダビデはこう告白している。「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ」てくださる方である、と。

1. 敵前での祝宴・・・神の食卓に招かれたゲスト

◆食卓に招くとは、招こうとする者に対する招く者の歓迎の心を表わすものである。ここでは神の食卓に招かれた者の幸いを見ることが出来る。神の食卓に招かれるとは、神のあなたに対する最高のもてなしなのである。

◆ダビデが王位を与えられ、イスラエルを治めるようになってから、親友であったヨナタンの子メフィボシエテを自分の王宮の食卓に招き、そこで毎日、食事をするように計らったという話がある。王の食卓は、私たちのそれとは比べものにならないほどの豊かな内容と質、贅沢で最高の味を味わえる食卓であることが想像できる。

◆サムエル記第二の9章でダビデは「サウルの家のもので、まだ生き残っている者はいないか。私はヨナタンのために、その者に恵みを施したい」という思いが、元サウル家で仕えていたツイバというしもべを通して実現する。「実は、ヨナタンの子で、足の不自由な方があられます。・・・その名はメフィボシエテ。」その者に与えられた恵みは・・・

(1) 父ヨナタンによってもたらされたものであること。

(2) 父祖サウルの地所(つまり不動産)のすべてを与えること。

(3) いつも王の息子たちのように、王ダビデの食卓で食事をしてよいこと

・・・などである。

◆ユダヤ人にとって共に食卓に着くということは重要な意味合いがある。それは親密さを表わし、相手を最大級の好意をもって受け入れていることのしるしであった。彼らは心に一物のある者とは決して共に食事をするのではない。共に食事をするということは、親愛の情の表現なのである。

◆ヨハネ福音書の最後の部分(幕屋の構造でいうならば、至聖所に当たる重要な箇所)でイエス・キリストが自分を裏切った弟子たちのために、食事を用意して彼らを招いておられる記事がある。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と。それは、主が弟子たちを赦し、心から受け入れ、歓迎していることのあかしなのである。

◆この神の好意、親密な思いを表わす好意は、いつの時代においても変わらない。「あなたは私のために食事をととのえ」とのダビデの告白は、ダビデのみならず、いつの時代においても、神はあなたを歓迎して必要なものを備えておられるという事実をあかししている。

◆飢えた者にすでに食事は備えられている。用意されている。整えられているのである。とりわけ、神のために働こうとする者にはこの恵みは現実となる。私たちは生きることを「食べていく」という言い方で表現する。私たちは「食べる」のためにどれほど心を配っていることか。それだけ重要な問題といえる。しかし神はその問題の解決を持っておられる。イエスは弟子たちに対して「朽ちる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい」と述べている(ヨハネ6章27節)。なぜなら、霊的な食物も物質的な食物も主は備えておられるからである。

◆ところで、ダビデはここで「敵の前で」と記していることを考えてみよう。ダビデはサウル王に追われていた。ダビデ自身も、またダビデを信頼して彼に従っていた者たち6百人の食卓の問題はどうだったのか。以下の聖書箇所には、神がある者を通して「敵前の食事」を備えられたことを記している。

(1) サウル王の追跡にあっていた時・ナバルの妻アビガイルによって(サムエル第一、25章)

(2) アブシャロムの謀反によって都落ちした時・・・メフィボシエテに仕える、しもベツィバによって(サムエル第二、16章)

(3) アブシャロムの謀反によって都落ちした時・・・バルジライとその友らによって(IIサムエル17章)

◆彼らを通して、ダビデとその一行は生きるに必要なものが与えられた。まさに、ひっぱく

する身の危険の中で神は「敵の前で」食事を整えられたのである。そして今日、主はこう言っている。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは彼のところに入って、彼とともに食事をする」と。(ヨハネ黙示録3章)。

◆私たちの人生は、まさに、メフィボシエテのように王なる方の食卓に招かれて、王の備えてくださったものを食べる姿になぞらえることができる。ダビデがメフィボシエテに語ったように、「いつも食事をしてよい」のである。私たちは神の最高のもてなしを受ける神の賓客として招かれているからである。なんと幸いなことか。マルチン・ルターは自分のことを「神の乞食」と呼んでいる。イエスは「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものです」と約束しておられる(マタイ5章2節)。

2. 放蕩息子に備えられた父の祝宴 (ルカ15章のたとえ話)

◆ルカの福音書15章には、放蕩三昧の生活をして落ちぶれ、困り果てて父の家に帰ってくる息子を息子として歓迎する父の喜びの姿を見ることができる。その歓迎ぶりは大変なもので、家でずっと父に仕えてきた兄が妬むほどのものであった。父は息子の兄に対して「死んでいたものが、生き返ったのだから、祝うのは当然ではないか」と言っている。

◆父は自分の息子が帰って来ることを知っていた。それで、その時が来るのを首を長くして待っていたのである。なんと、帰ってきた放蕩息子を見つけたのは父の方であった。父はかわいそうに思い、走りよって彼を抱き、なんども口づけした。そこには一言も息子を責めることばはなかった。父はしもべたちを呼びつけて、一番良い着物を持って来させ、それを着せた。また、手に息子のしるしとしての指輪をはめさせ、足にはくつをはかせた。そして肥えた子牛をほふるせて盛大な祝宴を催したのである。これが父の、息子に対してなされた歓迎であった。

◆皮肉にも、この放蕩息子のたとえ話の前の14章には、神の盛大な祝宴に招かれながらも、それを断って応じなかった者への神の怒りと悲しみが記されているのである。

3. 天国での備えられた婚姻の祝宴

◆神の救いにあずかった者はキリストの花嫁である。やがて花婿であるキリストが迎えに來られて、天において小羊の婚姻の席につき、そこでの永遠の祝宴が備えられている。

ウェルカム・ホーム (2)

私の頭に油をそそいでくださいます。(5節b)
 you welcome me as an honored guest(5b)

<はじめに>

◆前回に引き続き、5節bの主題も<神の歓迎>である。神のウェルカム、神が私たちを歓迎し、最高のもてなしをしてくださる方であることをダビデは告白している。NKJVではこの5節bをこう訳している。“**you welcome me as an honored guest**” その歓迎ぶりは「頭に油を注いでくださる」と同義なのである。このことがどんなにすばらしい恵みであり、祝福であるかをダビデは知っていた。

1. 歓迎の好意を表わすしるしとしての油

◆東洋のもてなしの習慣として、主人が客人を歓迎する意味で、家の入り口でその客に油(香油)を注ぐという習慣があった。あまり歓迎されていない客の場合には、この礼儀は省略されたようである。たとえば、イエスがある日、パリサイ人のシモンに歓迎され、その家の食卓に招かれたことがあった。そこでの出来事がルカ福音書の7章36-50節に記されている。

◆イエスがシモンの家に招かれ、食卓についておられることを知ったひとりの罪深い女が、香油の入った石膏のつぼを持って来て、・・・御足に口づけして、香油をイエスの足に塗った。イエスを招いたパリサイ人シモンはそれを快く思わなかった。そのときイエスはシモンにこう言った。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは口づけしてくれなかったが、この女はわたしが入って来たときから口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」

◆他にも同じような出来事が、マルコの福音書14章3節以降に記されている。そこではらい病人シモンの家にイエスが食事に招かれていた。そこにやはりひとりの女が登場する。彼女は非常に高価なナルド油の入った石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだのである。イエスはこの行為に対して、「この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです」と言ったのである。

◆このように、香油は頭や足など、直接、皮膚に塗ったのである。香油とは、文字通り部屋いっぱい放たれる良い香りのする油であり、当時はかなり高価なものであったようである。その高価な香油を招待したお客のために惜しげもなく注ぐことは、愛と尊敬を表わすものであった。この女のイエスに対する愛と尊敬は、多くの罪が赦されたことへの感謝のささげものである。ここに礼拝の精神が見られる。

◆聖書は「感謝と賛美を携え、主の御前に来たれ」と呼びかけている。礼拝とはくささげること>である。礼拝がいのちあるものとなるためには、そこに神に対する愛があるかどうかである。パリサイ人シモンは、社会的に立派な地位にあり、豪華な食卓を用意することができた。しかし、そのような食卓を用意することもできなかったひとりの女、また社会的には人々から後ろ指を指されるような女のした好意がイエスに評価されている。なぜなら、そこにはパリサイ人シモンに勝る愛と尊敬があったからである。香油の匂いはイエスのからだのみならず、衣服にも染み込み込んだ。イエスは幾日もその匂いを嗅がれ、喜んだに違いない。自分が大切にしているもの、良いものを主のためにささげること、それこそ神が求めておられる礼拝なのである。創世記4章に登場するアベルはまさにそのような礼拝をしたことで神に喜ばれ、受け入れられたのである。

◆少し話しが横にそれてしまったが、上記の福音書では、イエスを歓迎し、受け入れている好意のしるしとして香油がイエスの足や頭に注がれたということである。ただし、ここに見られるのは人から神へという構図である。ところが詩篇23篇でダビデは「主は、私の頭に油を注いでくださる」と述べている。つまり神から人への構図が見られるのである。ここには、神が私たちを愛して、惜しむことなく、歓迎を表わす高価な油を今も変わることなく、私たちひとりひとりの頭に注いでくださろうとしているのである。ダビデは、生涯にわたって自分に特別な歓迎と好意の油を注いでくださる方として神を経験した人であった。

◆ウェルカム・ホーム(Welcome Home)とは、「ようこそ!」という慣用句であるが、神のウェルカムは私たちの想像をはるかに上回るものである。神のために偉大な働きをしたしもべたちは、みな神から油を注がれた者たちであったことを忘れてはならない。もし神からの油注ぎがなければ、神にとって価値のある働きをすることはできないのである。私たちは神から愛と好意をもって歓迎されている。そのことを信じる者は幸いである。

2. 油注ぎのもつ歓迎の中身

◆ところで、私が「油注ぎ」ということばをはじめて聞かされたのは、1993年の甲子園リバイバル・ミッションを通してであった。「油の注ぎを、油の注ぎを、われらの心を燃やし続けて、油の注ぎを、油の注ぎを、われらの心に満たして」という聖霊を求める賛美が歌われた。

◆そもそも「油注ぎ」は、旧約聖書の歴史においてあらゆる時代にわたって行なわれていた。特に、神の偉大な働きを担った大祭司、預言者、王たちは、その任職のための油注ぎを受けた。それは神の働きのために「聖別するため」である。つまり、神の特別な目的のために、特別な働きのために「取り分けられ」、その目的と働きを果たすために、神からの特別な力と権威を与えられる必要があった。油注がれた者とは、神に特別に選ばれ(愛され)、聖別され、特別な力と権威が与えられた者のことである。大祭司のアロンと祭司たち、また預言者、そして王は、神からの油注ぎを受けてその働きをすることができた。預言者エリヤの後継者エリシヤは、エリヤから二倍の油注ぎを受け、文字通り、エリヤの二倍の働きをした人物である。神からの油が切れるとき、その働きの力は失われ、知恵を失った。したがって、神の働きを全うするためには、日々、神からの新しい油注ぎが必要だったのである。

◆キリストとは「油注がれた者」という意味である。イエス・キリストは、神のことばを語る真の預言者として、神と人をとりなす祭司として、そして主権をもって統べ治める王として、まさに油注がれた者なのである。

◆神の偉大な器であるベニー・ヒンは、油注ぎには三種類あると言っている。

(1) らい病人の油注ぎ・・・(神の歓迎の第一段階としての聖霊の油注ぎ)

◆レビ記では、宿営の外に出されていたらい病人を宿営の中に入れるために、祭司たちが彼らのところに行って、いけにえの血を注がなければならないことを記している。そしてはじめてらい病人は宿営の中に入ることができたのである。そして宿営の中で、再び、いけにえの血を注がれ、かつ油を注がれて後、彼らは神の民として受け入れられたのである。

◆これは私たちが神の小羊イエス・キリストを受け入れ、キリストの血潮によって聖霊の証印をいただくことを示唆している。この聖霊の油注ぎによって、私たちは神が私たちを愛して、大きな犠牲を払ってくださったことを悟ることができるのである。自分が神の子とされたことを確信するようになるのである。そして全く新しい人生がそこから始まる。たとえ人から迫害されても、神に従うことを選び取るようになり、ますます神を知り、人間の罪深さを知るようになっていくのである。これこそ神の、私たちに対する歓迎の第一段階としての聖霊の油注ぎの結果なのである。

◆このらい病人の油注ぎは、イエスを受け入れるすべての者に与えられる。

(2) 祭司の油注ぎ・・・(神の歓迎の第二段階としての聖霊の油注ぎ)

◆祭司は、毎日、幕屋で神に奉仕するために油を注がれる必要があった。ベニー・ヒンは、多くのクリスチャンたちは、このレベルでの聖霊の働きに対して無知であると述べている。

この祭司の油注ぎは、主に仕え、主の力ある働きをしていくための油注ぎである。と言っても、それは個人プレーをするためのものではなく、あくまでもキリストのからだである教会に仕え、建て上げていくための力と知恵の油注ぎである。

◆主は言われる。「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」と(ゼカリヤ4章6節)。神の働きは私たちの生来の力によるものではない。神から与えられる上からの力によるのみ、神に受け入れられるのである。この祭司の油注ぎの祝福は、「わたしの羊はわたしの声を聞く」とイエスが言われたように、日々、主の臨在の中を歩み、主の静かな御声を聞く交わりの中で与えられるものである。一度限りのものではなく、絶えず、繰り返し、そして常に新しくされるものなのである。もし油が切れるならばいのちがなくなる。しかも摩擦が生じてさまざまな軋轢(問題)をもたらすことになる。

◆ちなみに、らい病人の油注ぎは一度限りである。一度イエスを自分の救い主と信じ、受け入れた者は、故意に聖霊を拒まない限り、その油注ぎが取り去られることは決してない。神に受け入れられ続けていく。しかし、祭司の油注ぎがらい病人の油注ぎと違うところは、その祝福を失ってしまう点である。それゆえ、日々、新しい油注ぎを求めなければならないのである。「求めなさい。そうすれば与えられます。・・・天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう」(ルカ11章13節)と約束されている。

(3) 王の油注ぎ・(神の歓迎の第三段階としての聖霊の油注ぎ)

◆三つの油注ぎの中でこれが最も力あるものである。この油注ぎは、私たちをして神の高い権威あるところへと上げて圧倒的な力を与えるものである。神の全能の力が表わされて悪霊を縛りつけ、支配する権威・・・これが王の油注ぎである。

◆ベニー・ヒンもしばしばそのような油注ぎを与えられて神の力を解き放ち、多くの人々をいやし、しるしと不思議をもたらす器として用いられている一人である。この王の油注ぎの祝福は、神に全服の信頼をもって従う者に与えられる油注ぎであり、飢え渴いて求める者に与えられる祝福である。

◆ダビデが詩篇23篇で「あなたは、私の頭に油を注いでくださった」との告白は、これまで述べたような聖霊の油注ぎの祝福を言うのである。その祝福の第二、第三の祝福は、今も、神の好意として私たちに備えられている。果たして、神に飢え渴き、聖霊の油注ぎの祝福を求めようとしているだろうか。そのためなら、いかなる犠牲をも払うことを惜しまない覚悟があるだろうか。ダビデも、パウロも「この一事」を追い求め続け、そして与えられた神の器であったことを心に留めたい。

あふれる杯

私の杯は、あふれています。(5節c)
and fill my cup to the brim.(5c)

〈はじめに〉

◆23篇5節cに〈杯〉という言葉がある。日本の仁侠映画では必ずと言っていいほどこの〈杯〉が出てくる。親分の飲み干した杯を受けて飲むことにより、親分と子分が縁を結ぶのである。それは縁を固めるという意味で、〈かための杯〉とも言われる。この杯を交わすことによって義理と人情の世界を共有するのである。この関係は血縁関係である親子や兄弟よりも強いものであり、なにがあったとしても苦楽をともにするという約束である。また神前の結婚式でも、夫婦や親戚などが縁を固めるために〈三三九度の杯〉を交わすことになっている。

◆縁を結ぶための〈かための杯〉、実はキリストを信じる者たちもこうした杯を交わしたのである。イエスは十字架にかかれる前の晩に、杯を取り、感謝をささげて後、こう言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による契約です。」と(ルカ22章17、20節)。主の杯は私たちが主イエス・キリストと縁を結ぶために備えられた〈かための杯〉である。それはやくざの世界のように義理と人情の世界ではなく、神の恵みとまことに満ちた世界である。つまり主の杯を受けることによって、親分であるイエス・キリストにある恵みとまことの契約にあずかり、主から祝福の分け前をいただける者となるのである。その祝福の豊かさに目が開かれることを使徒パウロは祈っている。「心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちの受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるよう」と(エペソ1章18節～19節)。

◆ところで聖書の言う〈杯〉は、〈かための杯〉とは別にもう一つの〈杯〉がある。それは杯そのものではなく、杯の内容、つまり杯に盛られた中身を指し、しかもそれを味わうという意味合いがある。詩篇23篇の「私の杯はあふれている」という意味も杯の中身が重視されている。

◆詩篇23篇5節cの主題は〈キリストにある栄光の富〉である。もし私たちが聖霊によって霊の目が開かれるならば「私の杯はあふれている」と告白できるに違いない。

1. 詩篇65篇に見る杯のピクチャー

◆詩篇の他の箇所も見てみよう。16篇5節で「主は私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは私の受ける分を、堅く保ってくださいます。」と告白されている。イスラエルの民が約束の地カナンに入った後、12の部族に相続地が分配されたが、その時、神のために仕えるレビ族たちは、自分たちの相続地をもらうことはなかった。レビ族は他の各部族にそれぞれ分割され、そこで、しかもわずかに自分たちの住むところと神にささげる動物を飼うだけの土地をもらうことができた。それが彼らのゆずりの地だったのである。彼らは主に仕える働きのために、田を耕して作物を得ることはせず、人々が神を礼拝できるために、また神の律法を教えるために備えられた人々であった。彼らは土地と言う不動産を与えられない代わりに、他の人々にはない霊的な祝福が備えられたのである。その霊的な祝福とは主ご自身である。詩篇の作者は「主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です」という表現によってその特権を感謝しているのである。

◆神は、それぞれの人生に最善の杯(神の祝福、みこころ、ご計画、賜物等)を備えておられる。現状ではそう思えないことがあったとしても、主を信頼して歩んでいくときに、近視眼では見ることの出来なかった「あふれる杯」を味わえるようになるのである。またその杯は決して尽きることのない、無尽蔵でなみなみと注がれる杯である。神は私たちをして、「私の杯はあふれています」と告白させることのできる方である。「酒もタバコも飲まず、・・・もやらず、何の楽しみがあるのか」とこの世の人は言うかもしれない。しかし私たちにはこの世の知らない「杯」、なみなみと注がれた祝福の杯があるのである。

◆ところで、「私の杯はあふれています」という表現を絵にするとしたら、こんな感じになるのでは・・・というのが詩篇65篇である。

神よ。あなたの御前には静けさがあり、シオンには賛美があります。

あなたに誓いが果たされますように。

祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。

咎が私を圧倒しています。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してください。

幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。

私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。

私たちの救いの神よ。あなたは、恐ろしい事柄をもって、義のうちに私たちに答えられます。

あなたは、地のすべての果て果て、遠い大海の、信頼の的です。

あなたは、御力によって山々を堅く建て、力を帯びておられます。

あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます。

地の果て果てに住む者もあなたの数々のしるしを恐れます。

あなたは、朝と夕べの起こる所を、高らかに歌うようにされます。

あなたは、地を訪れ、水を注ぎ、これを大いに豊かにされます。

神の川は水で満ちています。

あなたは、こうして地の下ごしらえをし、彼らの穀物を作ってくださいます。

地のあぜみぞを水で満たし、そのうねをならし、夕立で地を柔らかにし、
その生長を祝福されます。

あなたは、その年に、御恵みの冠をかぶらせ、あなたの通られた跡には
あぶらがしたたっています。

野の牧場はしたたり、もろもろの丘も喜びをまとっています。

牧草地は羊の群れを着、もろもろの谷は穀物をおおいとしています。

人々は喜び叫んでいます。まことに、歌を歌っています。

◆ここには神の恵みを三つの面から描いている。

- (1) 神は私たちの祈りを聞いてくださる方。神と人とを隔てる罪を赦し、近づけてくださって、良いもので満ち足らせてくださる方であること。
- (2) 神の民が、この世にあって遭遇する様々な苦難と戦いにおいて、勝利させてくださる方。まさにこの方こそ「信頼の的」であること。
- (3) 自然界をとおして表わされる神の恵みの豊かさは無尽蔵である。この世の資源は、いつかは尽きる。しかし「神の川は水で満ちて」あり、そこにはいつも「良いものが満ち」「豊かにされ」「油がしたたっている」、そんな現実には喜びと賛美の歌がある。・・・まさに「杯はあふれて」身に余るほどの祝福が記されている。

◆もっとも、神が私たちの人生に注いでくださるうとする恵みのすべてを書き表すことは不可能であるが・・・

2. キリストにある無尽蔵の恵み

◆ヨハネの福音書1章には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は〈恵み〉と〈まこと〉に満ちておられた。・・・私たちはみな〈この方の満ち満ちた豊かさの中から〉、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。・・・というのは、・・・恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」と記されている。

◆この恵みを経験した使徒パウロはピリピ人への手紙4章でこう述べている。

「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の〔**栄光の富**〕をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます」と。

◆パウロという人は、「富」とか「豊かさ」といったことばを好んで用いた人である。また「あらゆる」「どんなことでも」「さらに」「はるかに」「すべて」「・・・を越えて」「測り知ること

のできない」ということばもそうである。けちな神でなくリッチな神、しかも並外れてリッチな神が私たちの必要を満たすために、御子イエス・キリストを私たちにお与えになったのである。

◆私たちは単純に言うなら、「必要のかたまり」の存在である。赤子、幼児、少年少女、青年、壮年、老人に至るまで、それぞれの時期に与えられるべき必要がある。それが満たされなければ次の時期に持ち越していく。人の必要はとどまることを知らない。その時期時期の必要が顔を出す。

◆ところで聖書は「神は・・・私の必要をすべて満たしてくださる」と述べている。しかし、私たちは自分の必要が何であるかを知らないことが多い。私たちが考える必要はしばしば短絡的なのである。たとえばコリント第二12章7～10節。パウロは「肉体のとげ」を持っていた。このとげが取り去られるように彼は神に願った。この「とげ」が何であるかは説明されてはいないが、パウロにとっていつも気になるものであった。「これさえなければどんなによいだろう」と思ったかもしれない。しかし神の側から見るパウロの必要はその「とげ」を取り去ることではなく、「とげ」を持ったままで彼を強めることであった。その「とげ」に支配されない強さ、・・・これがパウロに対する必要であったのである。この必要は果たして満たされたのか。然りである。「とげ」が取り去られないことで、パウロは神の恵みが何であるかを経験したのである。

◆もうひとつ、ピリピ4章でパウロは、自分の欠乏をピリピの教会がおぎなってくれたと記している。「乏しい」という現実が確かにあった。ピリピから経済的支援が届くまで、その長い待ち時間、もし短絡的に考えるなら、「なぜ、神はこの私の必要を満たしてくださらないのか」と思ったに違いない。しかし必要があるならば、必ず、その必要が真に差し迫った時に、神は満たしてくださるのである。それまでの待ち時間こそ、神の側から見るならば、パウロの必要であった。つまり、いつでも、どこでも、どんなときにも神を信頼することを身に着けるという〈必要〉である。神の備えは万全である。神の助けは決して遅れることはない。私たちに必要なことは、神を信頼すること、そしてまさに神の時に具体的な必要が満たされるということを知る(経験)ことなのである。

◆「私の神は、私の必要をすべてを満たしてくださる」というのはそういうことである。しかもその満たし方は尋常ではない。「キリスト・イエスご自身にある栄光の富をもって」とある。「栄光の富をもって」ということばは「栄光の富の中から」という意味ではない。「栄光の富に従って、栄光の富に応じて」という意味である。

◆たとえば、道端にひとりの乞食がいたとする。そこに一人の億万長者が歩いて来てその乞食の前を通りかけ、乞食の乞うままに千円ほど与えたとする。その場合、金持ちはその富「の

中から」与えたが、その富「に従って」、その富「に依じて」与えたのではない。もし、億万長者がその富「に従って、」その富に「に依じて」与えたならばどうであろうか。全く桁違いの額になったに違いない。そのような億万長者はなかなか見当たらないのが現実である。しかし私たちの神は、キリスト・イエスにある栄光の富「に依じて」、それ「に従って」私たちの必要を満たしてくださる方である。この祝福が神の子の生涯に約束されているのである。それゆえ、詩篇の作者のように、私たちも「主よ。私の杯はあふれています。」と告白する者となろう。

ただひとつの願い

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。

私は、いつまでも、主の家に住みましょう。(6節)

I know that your goodness and love will be with me all my life;
and your house will be my home as long as I live.(6)

<はじめに>

◆これまで珠玉と言われる詩篇23篇を味わってきた。この詩篇の前半は、私たちの神が羊飼いにたとえられ、その羊飼いの目はすべて羊に注がれていた。羊飼いは羊に必要なすべてのものを与え、羊が道に迷い、倒れそうな時にも、その羊を決して見捨てることなく、あらゆる危険から守る忠実な羊飼いと描かれていた。

◆後半では、神が客人を家に招く主人にたとえられ、その歓迎ぶりは気前が良いとしか言いようがないものである。どう表現したとしても、表現し尽くせないもどかしさをダビデは感じていたに違いない。使徒パウロも「人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるよう」と祈っている(エペソ3章)。どうして人知をはるかに越えたものを知ることができるのか矛盾に思えるが、この表現は言葉に言い尽くし得ないキリストの愛をぜひ体験して欲しいという願いが込められている。

◆さて、ダビデが主のきわめがたい祝福を味わっていく中で、彼は感激をこめて「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私のいのちの日の限り、追ってくるでしょう」と表現している。「主のいつくしみと恵みとが、私のいのちの日の限り、追ってくる」生涯、そんな歩みが保障されている生涯に思いを馳せながら、それに対するダビデの取った態度がこの詩篇の結論である。その結論とは「私は、いつまでも、主の家に住みましょう」、つまり、いのちの日の限り、主の家に住むという誓いであった

◆このように、23篇6節には詩篇23篇の二つの結論が記されている。一つは、「まことに、私の日の限り、いつくしみと、恵みとが、私を追ってくる。」という主の私に対する関わりの結論であり、もう一つは、「私は、いつまでも、主の家に住みましょう。」という私の主に対するかわりの結論である。後者は、詩篇23篇全体の神の恵みに対する唯一の応答箇所である。この二つの結論の順序が重要である。なぜなら、神の豊かな祝福が惜しみなく自分の生涯に注がれていることを知った者だけが、真の意味で「私は、いつまでも、主の家に住みましょう」と誓うことができるからである。

1. いつくしみと恵みとに追われる生涯

◆得体の知れない何者かに追いかけられ、追いつかれまいと必死に逃げている最中に、目を覚ます。気づくとびっしょり汗をかいている。・・・多かれ少なかれ、そうした夢を見た経験はだれにでもある。何かに追われている。なすべき責任を果たしていないところから来る罪責感なのか、根拠のない不安なのか、・・・その心理的要因は分からないが、実に後味の悪いものである。得体の知れないものに追われる生涯ではなく、その生涯を通じて、神の「いつくしみと恵み」だけが追いかけてくるような生涯があるとすれば、それはなんと幸いなことであろうか。

◆旧約聖書を調べると、「いつくしみ」と「恵み」はワン・セットで用いられていることが多い。「ハレルヤ。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」（詩篇106篇1節、107篇1節、118篇1節）。厳密にいうなら、「プレイズ&ワーシップ」ということばの意味合いが異なるように、「いつくしみ」と「恵み」もその意味は異なる。「恵み」は、私たちに対する神の変わることのない一方的な好意を表わすことばである。神は私たちに惜しみなく良いものを与えたくてしようがない、そんな心をもっている父である。私たちが、これこれのことをしたからとか、何かができるから、ということで左右などされない神ご自身の一方的な好意。「わたしがこうしてあげたいのだ」という思いこそ「恵み」といえるものである。そして、その「恵み」が具体的に表わされたものが「いつくしみ」なのである。それは神の子どもとしてのあらゆる必要、また信仰の戦いにおける実際的な助け、守り、支えを与えてくれることを含んでいる。

◆たとえば、これまで詩篇23篇で見てきたように、羊飼いが羊に対して取る行動(動詞で表現)に注目しよう。「緑の牧場に伏させ」「伴われ」「生き返らせ」「導かれます」「ともにおられ」「食事をととのえ」「油を注いでくださいます」・・・これらはみな「いつくしみ」の行為である。その行為を裏付ける心の動機が「恵み」である。受けるに値しない者に注がれる神の一方的な好意、この「恵み」と実際的な「いつくしみ」とが一つとなって、いつも「追いかけてくる」のである。それは決して気まぐれではなく、変わることなく一貫しているのである。

◆旧約聖書ではいろいろな場面で神の民たちが「主のいつくしみは深く、その恵みはとこしえまで」と賛美している。そのときは必ずなんらかの形で主の栄光が現わされている。

◆使徒パウロは自分が神の祝福を受けるに値しないと思っていた。彼は長い間、律法主義の世界の中で生きて来た。律法主義とは、神のみこころや神の目的を自分の力でなし得ると考えている考え方であり生き方である。彼はその世界で認められた人物であり、それゆえ彼は自分を誇ることができた。なにごとをするにも自信満々で、道徳的にも、人から後ろ指を指

されるようなことをしたことの無い立派な人物で、人にも大きな影響を与えるような人物であった。そして、先だってクリスチャンたちを迫害するという行動を取らせた。

◆律法主義的な人を神の祝福にあずからせることは至難のわざである。断定的に言えば、不可能である。ところが神は、そのような律法主義の世界に生きている人をも造り変えてしまう方なのである。どのようにして神はパウロを変えたのであろうか。変えられるためには、その人が拠り所としている土台(能力、経験、育ち、学歴、人からの評価、自信等)が崩されなければならない。自分を支えてきた土台のもろさを認め、それを失うことは相当の痛みを伴うに違いない。言ってみればその人の死を意味する。そのことなしに、神の祝福がその人の生涯を支配することはないのである。

◆パウロはすでにステパノの殉教を通してその根底は揺らいだと察せられる。ステパノがイエスのように、死の淵に立っても人のためにとりなすことのできる力とはいったい何なのか、これが自分の中にあることをパウロ自身は知らされたいに違いない。表面的には何の痛手がないように見えたとしても、神のパンチはじわっと効いているのである。そしてパウロが最北のダマスコまでもクリスチャンたちを追いかけて行き、あと少しというところで彼は主と出会った。それは衝撃的な出会いであった。パウロは盲目となり人の手を借りることなしには生きることができなくなった。そんな中で、彼が迫害してきたクリスチャンの一人アナニヤによって神の赦しとパウロに対する神のご計画が告げられたのである。

◆パウロはテモテ第一 1 章 15～16 節でこう言っている。「私は罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださいましたからです。」と。パウロに対する神の真実、神の恵みといつくしみは、変わるどころか、彼が息を引き取るまでその豊かさは増し続けた。神に選ばれ、神に召されるとは、実にそのような生涯なのである。恵みから恵みへ、信仰から信仰へ、尽きることのない無尽蔵な祝福の富の中に生かされ続けていく生涯である。このことを信じるなら、神のいつくしみと恵みから、あなたを引き離すことはだれにもできないのである。

◆コリント第一 15 章 9～10 節のパウロの告白も付け加えよう。「私は使徒の中では最も小さな者であって、使徒と呼ばれる価値のないものです。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」・・・このように、律法ではなく神の「恵みといつくしみ」だけが人を新しく造り変えることができるのである。

2. とこしえに、主の家に住むこと

◆さて、「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」というダビデの誓いは、彼の生涯を動かした情熱である。あなたを動かしている情熱は何であろうか。ダビデは詩篇 27 篇にも、同じく彼が最も願っていることを次のように記している。

*「わたしは一つのことを主に願った。私はそれを求めている。
私はいのちの日の限り、主の家に住むことを。
主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために」*

◆「主の家に住む」とは主を礼拝し、主を知ることを意味する。「主の家」とは「主の宮」「神殿」とも言い、新約時代においては、主を信じる私自身のことである。なぜなら私自身のうちに主が住まわれるからであり、その主と親しく交わることが礼拝なのである。主が私のうちに臨在してくださること、主の臨在で私のうちが満たされること、これこそダビデが求めた「ただ一つの」ことであった。しかもその経験がいかにすばらしいものであるかを彼は知っていたのである。ダビデにとって「臨在こそ、わがすべて」であった。

◆この臨在の経験を求め、あるいは持ち続けるためには、〈心を神に集中する〉ことが必要である。しかし私たちの回りにはそれを妨げるものが数多く存在する。たとえば、騒音、人の声、テレビの音、電話の呼び出し、人の訪問、等の物理的な妨げ、あるいは、人に対する恐れ、思い煩い、二心、ストレス・・・といった心理的な妨げがある。また、空想、おしゃべり、交わり、買い物・・・といった悪いとはいえないものでも、神との交わりの生活を集中させなくする要因となることがある。このように私たちの敵は様々な方法で、私たちが主と交わる経験を妨げようとしているのである。

◆それゆえダビデは「一つのことを主に願った」のである。これは主との交わりを自分のライフ・スタイルの中で優先的に選び取るという決心を意味している。「私はそれを求める」という強い決心なしに、集中して主と交わる生活ができないことを彼はよく知っていたのである。しかるにダビデは、詩篇 86 篇 11 節でも「主よ。私の心を一つにしてください」と意識的に祈っている。なぜなら、それは自動的に決して得られないからである。

◆「主の家に住む」という決心は、「祝福を受け継ぐために召された」者(1ペテロ 3 章)に求められる重要なものである。「主の家に住む」とは、主の臨在をもたらす。その臨在が満ち溢れるとき、栄光の雲はその人自身だけでなく、まわりにいる人々にも及んでいくのである。

完